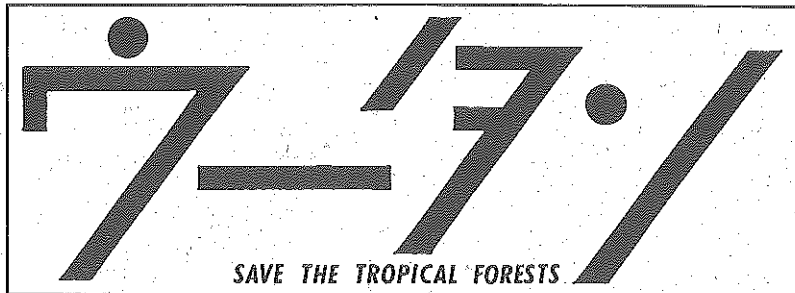


森 の 通 信



36

Hutan

1995年7月7日発行



(樹の上で寝る
オランウータン: サバ付)

ウータン・森と生活を考える会

【一部】300円

【年会費】3000円

【郵便振替】00930-4-3880

〒530 大阪市北区中崎西1-6-36 サクラビル新館308号「関西市民連合」事務所気付
phone 06-372-1561

PRINTED ON RECYCLED PAPER

Everyday on The 熱帯林!

辻村方孝

川の話をした。

この五月に引っ越した。新居は、茨木市を流れる安威川のほとりにある。

川の水は意外に澄んでいて、魚の群れが泳いでいるのが見える。魚をねらってコサギが数羽、毎朝やってくる。他の野鳥も多い。歩くだけでけっこう楽しめるし、双眼鏡があればなおよし。休みの日には、釣人をはじめたくさんの人が思い思いに川を楽しんでいる。今、この川と、流域に住む人々の関わりを調べてみようと思っている。毎日飲む水は、この川から来ているのか？ 上流から下流まで、川はどのような姿を変えるのか？ そして、川で遊ぶ人は、ダムについてどう考えているのか？

みなさんもやってみませんか。

〔ウータン活動報告〕



95	Y.W.C.A 雀部真理さんの「フィジ
3	ー・ソロモン島帰国報告会」参加。
6	熱帯林連続講座「フィリピン」編
4	関良基、青木恵美子さん。
4	「こみ」を考える会」等と震災廃材
18	問題を大阪府と交渉。
4	第9回熱帯材削減会議。「関西熱
23	帯木材削減委員会」準備会と称す。
4	ウータン総会。
29	熱帯林連続講座「熱帯林と日本」編
5	荒川純太郎さん
20	A.P.E.C. N.G.O 関西実行会参加。
5	第十回関西熱帯木材削減委員会。
31	ウータン、ハイキングー奈良。
6	「こみ」を考える会」の西宮廃棄物処
10	分地ツアーに参加。
6	「枝打旅」下見。
24	

森の通信

HUTAN 36号 目次

熱帯林連続講座 part2

震災廃材

CONTENTS

6回の連続講座を終えて	...3
フィリピン編	...4
熱帯林と日本編	...6

西岡 良夫...9
熱帯林を考える
南洋材開発輸入の軌跡その2
猪俣 栄一...11

阪神・淡路大震災

と環境問題

家具①	...16
ウータンに届いたお便り	...18
ウータン・フォト・ギャラリー	...19
スケジュール	...20

山本 達士...7

熱帯林連続講座・Part II

6回の連続講座パート2を終えて

連続講座で元気に

麦島 きみこ

連続講座の活用

鈴木 達子

オゾンホール、森林破壊、洪水に地震・・・etc, etc. 一方でマクドナルド、紙コップ、自動販売機など便利さに囲まれて大きくなる子供達。オウムの信者でなくともハルマゲドンを信じたくなるような世相。そんな中で、土曜の夜に開かれた熱帯林講座に出る私の密かな楽しみは、カラオケやディスコに行くかわりにこの講座をのぞきに来る若者達の顔を見ること。それを見ると、私自身元気になるのです。日本の未来もひよっとすると捨てたものじゃないかも・・・。

そんな希望（淡い希望？泡？じゃないよネ。）を持っていつも帰りの電車に乗るのでした。

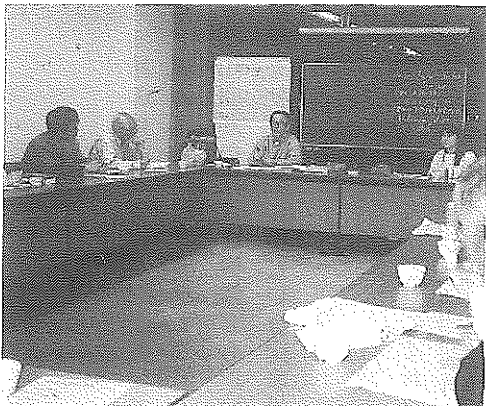
今世界で何が起こっているかを知ることは、大変重要なことであり、ウータンの連続講座は、私達に世界の現状を身近な問題として考える機会を提供してくれた。

「知る」ことは第一歩にすぎず「行動」を伴わなければこの貴重な機会も何も産み出さないが、連続講座で多くの関心と同じくする人達と出会い、意見を交わす事が「行動」の為のきっかけにもなるのではないかと思う。

ただ一つ残念なのは、講座での経験は個人のレベルに留まり、参加者が何をなすべきかの提言あるいは共通意識を作り出すことまでではできなかつたことである。

いまや環境問題は保護を訴えるにとどまらず、保護する事と衝突す

る利害の調整のためにも環境の枠をこえ、開発や人権といったNGOとの連携が必要になってきている。環境を守ることは誰のためでもない私達自身の問題なのだから「誰かに何かをしてあげる」のではなく「私たち」のために何をなすかを考える場にもっと講座を活用していけたらと考える。



第5回 フィリピン編——破壊と造林計画——

シリーズ熱帯林連続講座PART II—アジア・太平洋地域の熱帯林は今—

☆フィリピンの森の破壊

ルソン島でも、ミンダナオ島でもほとんどの森が消滅しています。アキノ政府に変わって熱帯材輸出禁止令が出されても伐採が続いています。

フィリピンでは今、政府発表でも国土の二二%しか森林が残されています。天然林は僅か七%。

最近フィリピンへ行った関良基さんと青木恵美子さんに話して貰いました。

☆伐採、非伝統的焼畑

「フィリピン国土の森林の大半が伐採、違法な非伝統的焼畑で荒廃しています。五十年前まではほとんど森に覆われていたんですが……。」と関さん。

「第一が商業伐採。図1のようにアメリカから始まった伐採は、日本によりさらに増えました。そして違法伐採も多く見られます。」

第二に、不法占拠者と呼ばれカイン

ギンの焼畑。都市などで生活に困った人々が入り、森を非伝統的な焼畑で破壊しました。」

もともと森は、多くの先住民の場であって、彼等を追い出した事も大きな原因になっています。ミンダナオ島のアポ山で、原生林に住む先住民を追いつす計画も進んでいます。

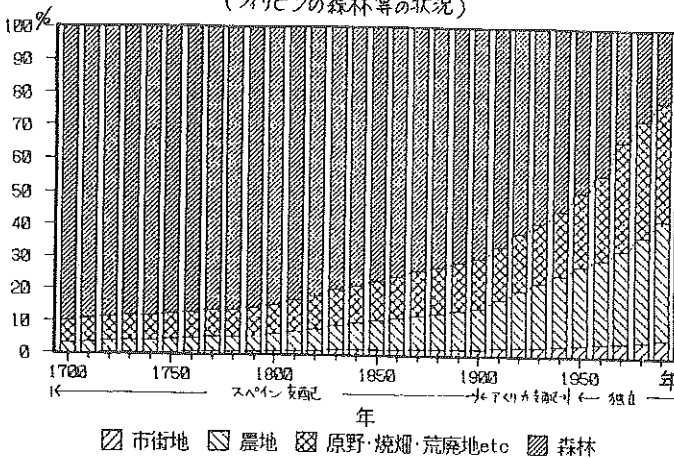
☆造林政策と課題

「最近、フィリピン政府の植林事業が進みだしました。第一段階で『森林破壊の元凶』といわれた人々に対して耕作権を保障し、破壊をくいとめるプロジェクトが行われてます。これは、ISFP（統合社会林業政策）というものです。カインギンらに7haの耕作を認め、政府が国有地を「貸し出す」方法です。二五年契約で、農地内の二〇%を植林化義務を持つものです。」

「また共同体森林管理協定も出来、

大面積の植林と管理で、二五年で保有権を認めるといふものです。第二段階で、山間部の住民の労働力も用い、荒地を植林化しようという国家植林プログラム(NFP)も実施されていますが、まだ普及しているとは言えませんが、関さんが語ってくれた。(P)

表 フィリピンの土地利用の長期的趨勢 (フィリピンの森林等の状況)



※マウント・アポで見て来たこと

青木恵美子

ダバオに国内難民として逃げて来ていたダトウ(先住民のリーダー)の一人は、こう言いました。「私達には備蓄する習慣はありません。今日食べられる物があれば良いのです。」

彼等は聖なる山マウント・アポによって生かされています。生きるために必要なものはすべて、この山が与えてくれます。この大切な森林を、会社の人間がやって来て伐採をしまいましました。しかも、その跡地にすぐ育つ樹を植えようとしているのです。

同じ樹ばかり植林するという事は、森を殺すことになりす。いろんな種類の樹があつて、色んな種類の草が生えていて、初めて森は生きることができ、その豊かさの中で、彼等は貯蓄せずとも生活が出来るのです。

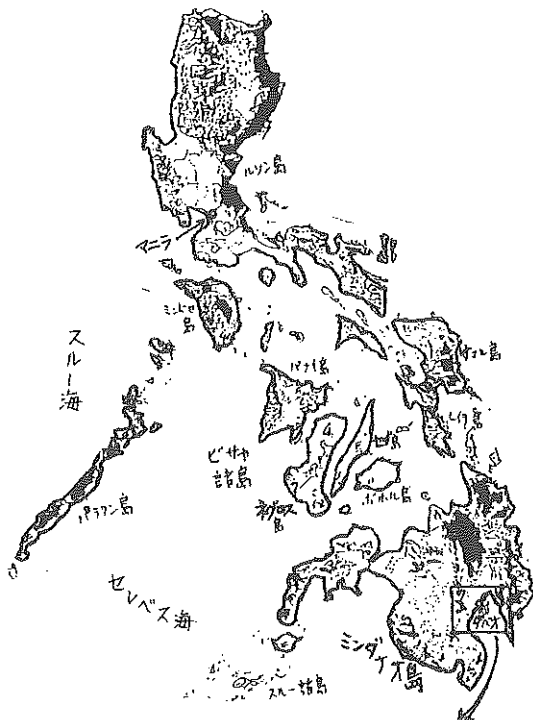
聖なる山、マウント・アポにあるその豊かな熱帯雨林は、そこに住む四六万人の先住民ルマドたちによって、今まで辛うじて守られてきました。先住民ルマドの人達はこの山に対して強い

信仰を持って、決してマウント・アポに向かつて指でさしたりしません。フィリピンには、自然を保護するNIPASと呼ばれる法律がありますが、その目的は開発でした。例えば、マウント・アポの頂上近くにビナードと言う美しい湖があるのですが、ここにゴルフ場をつくる計画があります。現在湖には、谷川沿いに二日もかかって登らなくてはなりません。

自然を守ると言いつつ、自然環境破壊を内蔵したNIPASはマウント・アポから、今までマウント・アポの自然を守ってきた先住民ルマドの人たちを追い払おうとしています。

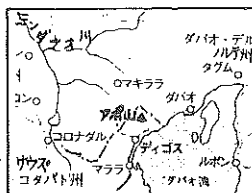
図 フィリピンの森林残存地域

Philippine Center for Investigative Journalism, SAVING THE EARTH: THE PHILIPPINE EXPERIENCE, p.4. より引用



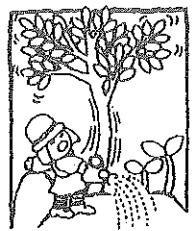
※マウントアポ 周辺拡大図

○アポ山はフィリピン最高峰で、猿を食べるスリピプアジ生息地でも有名



第6回 熱帯林と日本編

荒川 純太郎さん



順調に進んできた熱帯林連続講座パート②も、いよいよ最終回を迎えました。今回は広島より、アジアに学ぶ会代表の荒川純太郎さんを招いて、話をしていたきました。同じ想いを持つ人々と、学びの時を持てるのが嬉しいという言葉で始まり、マレーシア社会の話そして広島森林へと話は進みます。

マレーシア複合多民族社会

人口比から見ると、中国人とインド人で人口の半分近くを占めるので、マレーシアではマレー系や先住民を保護する目的でブミプトラ政策をとっています。ただ保護とは言っても先住民の何が保護されているのか大いに疑問ですが、多民族が住む為三つのカレンダーがあり、三つの言語で授業が行われるそうです。物差しの多様性は豊かさであると荒川さんは言われました。

サラワク先住民と開発

内陸部に住む焼き畑農業をしている先住民は、ダヤク族と総称されています。彼らは川沿いのロングハウスに住んでいます。一家族ごとに部屋が仕切られていて長屋のことで、大勢が一つ屋根の下で暮らすのです。自然と一体となった世界があり、例えば人間も動物も数え方が同じだそうです。生きとし生けるものは人もすべて皆が平等なのです。その先住民社会に押し寄せる開発の波、商業伐採に巨大ダム開発、観光開発そして石油やLNG。日本はこのすべてに関わっています。森はスパーマーケットという人々にとつて、森を追われる事は死活問題であり、民族の存亡に関わる事なのです。

熱帯林と日本

広島県や林業者とともに荒川さんは「人と樹の会」を作り、地元で森林の

育成に力を入れておられます。枯損木（立ち枯れた木）を切るところから始まり、松枯れの整理をし、そのような活動を通じて、遠い国の森林破壊も考えようという会だそうです。切った木は炭にして、公園の池の浄化に使われます。広島県は松が多く、松枯れの問題を抱え、また南洋材の需要が大変多い県です。また人と樹の会はサラワクより研修生を受け入れる、あるいはサラワクに森林保護の協力をするなどの事もしているそうです。

最後に

最後に参加者へのメッセージとして日常の意識化・例えば箸を持ち歩いて環境を意識し続ける、そして関連づけ・例えばハンバーガーを食べない（森を潰して広大な牧場を造っている）、を考える事を言われました。

阪神・淡路大震災と環境問題

山本 達士（神戸学生青年センター）

この度の阪神・淡路大震災は、神戸市が想定していたM5を遙かに上回るM7でした。まず人命救助、次にライフラインの復旧、それからようやく生活再建。命からがら助かり、ようやく食べ物にありつき、仮設住宅に入れるか、今だに避難所生活を送っています。

被災者がまだ苦しい生活を強いられている時に、復興と環境問題をどう両立させるかというのことは大変難しい問題です。

環境問題で、まず問題になったのが『野焼き』です。二月上旬から各自治体が一斉に始めました。宝塚市では、野焼きの煙がマンションを直撃し、問題となりました。この宝塚での問題がなければ、野焼きは復興を大義名分に現在も続けられていた

のではないでしようか。六月には野焼きを行った建設業者が廃棄物処理法違反で警察に捕まっていました。こういう矛盾はあまりあつてはいけなと思います。

肝心なことは、なぜ野焼きをしてはいけないかという問題です。それは有毒物質が発生するからです。つまりもともとコストや利便性のために、身の周りに化学物質を多用していることが問題と言えます。野焼き現場だけでなく、多くの火災現場においてもダイオキシンなどの有害物質の発生が懸念されます。仮設焼却炉でも、燃焼温度低いため、有害物質の発生がどの程度抑えることができるか疑問が残ります。この問題は、アスベストでも同様です。

アスベスト暴露によって発癌率は

五倍増えると言われています。以前に公立の学校施設でアスベストが問題となった時に、除去費用の出せないところは、困り込みなどの処置で放置しました。今回の震災で建物が傾き、アスベストの除去作業が出来ないケースもありました。アスベスト問答無用の解体もありました。解体現場横では、1畝中二五〇本という規制基準の二五倍も検出された例もあります。

今まで放置してきたさまざまな問題のツケが、大災害を機に、一挙に回ってきたという印象を強く受けました。大災害時の被害を最小限に抑えるためにも、日頃から生活環境を見直すことが大切だと感じました。

また被災者の方々にはこれらの危険性をどう知らせるべきかという議論

もありました。情報を整理するのが大変な中に、新たに混乱を招くものにもなりかねません。しかし、知らなかった為に後で取り返しの着かないことにもなりかねません。

ほとんど知らされていない情報としては、三四万人分の下水処理行っていた東灘処理場が壊滅し、海に堰を設けているだけという話があります。ようやく水が使えるようになった被災者に、下水を流す量を減らすうとは言い出せにくく、東灘で少し取り組みがあっただけで、今日に至っています。堰の海側ではCODが5という報告もあり、大阪湾の赤潮による深刻な被害が予想されます。

しかし、今回の震災で評価すべき点もあります。新しくアスベスト対策を考えるネットワークが神戸にできたこと、県主導でフロン回収が実働したことが挙げられます。特にフロンの回収・処理には、技術や費用が必要で、市民レベルでは手に負えません。行政、業者、市民が連携して取り組み、約五千台の冷蔵庫から

冷媒フロンを回収できたことは、率直に評価すべきだと思います。さらにこのフロン回収に取り組んだ自治

◀(写真)

◀NGOが冷蔵庫のフロン回収に協力(東灘区)



体では、今後も継続して実施していくことになり、震災がフロン回収に弾みをつけた結果となりました。

◀うず高く積み重ねたゴミ山(西宮市甲子園溪)



震災廃材もパーティクルボード等に再利用出来る！

――兵庫県廃材リサイクル目標は僅か二・三%! 廃材利用で熱帯材不足解消を――

事務局長・西岡良夫

「相互協力必要!自治体のリサイクル」
阪神大震災が起こって、二月から何
度も被災状況を見に行った。最初は、
悪魔のような姿に驚くばかり。会員の
家の被災を見たり、聞いたりして、私
達にも出来ることを事務局で考えた。

「震災による廃材は、昨年サラワク
からの丸太輸入の約8割の三五〇万ト
ン。そして仮設住宅も廃材にする。こ
れは、ぐちゃぐちゃになった木造家屋
の解体と廃材の再利用やで」と。

神戸や芦屋のリサイクルが進まない
ので、『ごみを考える会』の人たちと
廃材を再利用するチップ業者や木材会
社を訪れた。ホクシンという木材会社
に行つて情報を貰い、次の週に、廃材
を再利用するチップ業者『木材開発』
へ行つた。

「我々、チップ業者は近畿で一三社。
月量三二五〇トンの廃材を処理出来

る。震災が起きて直ぐ、大阪産廃協会
として大阪府等に提案したけど!。」

と木材開発・鷹野専務が語つてくれた。

既に民間の解体業者からチップ業者
へ、そしてパーティクル・ボード会社
へと、一部の震災廃材が運ばれ、再利
用されている。もつと進めるには、自
治体の協力が必要なのだ。

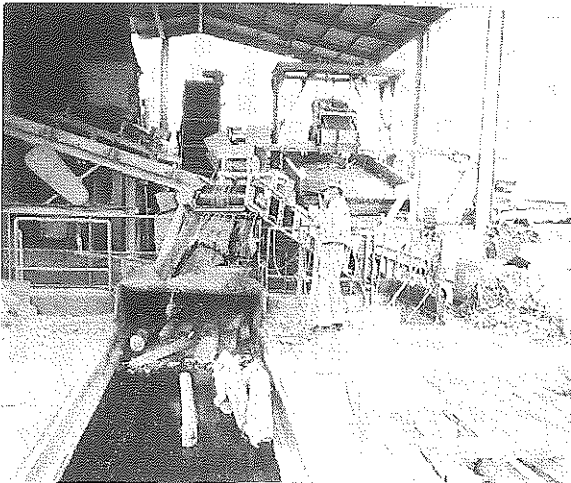
同日四月十八日、廃材等の野焼きも
続いており、大阪府環境局環境整備課
と話し合いを持つ。大阪府はつれない。

「指摘のように、廃棄物処理法違反
の野焼き問題、廃材利用といつても、
兵庫県等から提案が無いとできない。

廃材置場を大阪府の土地・堺7-3区
に移しても汚水が浸み出るやろ」と。

みんな、この発言に顎然! 柱材の
再利用なら有害物質が出る恐れがない
のに、なんで廃材ストック・ヤードが
出けへんのや! 費用か、手間か?

その後、尼崎市、兵庫県と交渉する。
「チップ業者に頼んだら割高になる。」
「業務を一年でも早くしたい。」「埋
めたり、焼いたりの方が簡単。」とい
う考えが強い。だから、大阪府等の自
治体が手を差し伸べる必要があるんや。



▶写真 廃材等をチップ化し、ボード等にする

※6月26日、ナゴヤのフルハン工場、増田専務よりFaxいただいた。「廃材再利用を東海地区で10万t有処理能力あり」
 「西宮市の分も6月中旬のボード利用等、ハテアップ化している」との嬉しいニュースだ!

【熱帯材不足に、廃材利用の確立を!】
 日本合板連合会は、「熱帯材使用削減目標を三五%から、五〇%に」と今年に変えた。熱帯材不足が明らかだからだ。針葉樹合板や複合合板より建築廃材再利用を進めるべきでないか。

一九八五年の「木くず」の再利用率は約五割。一九九〇年の建設廃棄物のうち発生廃材は、全量の一〇%弱の約七五〇万トンで、チップ化量が一五〇万トンと二〇%が再利用されている。

だが、四月十四日発表の兵庫県廃材リサイクル目標は、表1のようにたった二・三%。またコンクリート・ガラの再利用も約七%で、殆どが埋立て、焼却だ。確かに、大阪府が言うようにチップ業界は手一杯だが、廃材置場を確保すると長期的な利用ができる。このままだと、震災で環境問題は全く置去りにされる。全ての廃材を再利用できないが、不純物が殆どない柱材の再利用を自治体は進めるべきだ。

【廃材利用の今後の課題】

六月十日、西宮の元野焼き場の処分

表1 兵庫県震災廃棄物処理計画 4月14日兵庫県発表

種類	発生量	リサイクル量	リサイクルの用途等
不燃物	1500万t	コンクリート から 1102万t	*住宅、建築物系 ①土地造成 (用材) 639万t ②建設資材 19万t 小計 658万t
			*公共公益事業系 ①土地造成 (用材) 382万t ②建設資材 62万t 小計 444万t
		(実際のリサイクル率7.4%)	*住宅、建築物(製鋼等) 28万t *公共事業系 (製鋼等) 18万t 小計 46万t [実リサイクル率 100%]
		合計	1156万t
可燃物	350万t	木くず 8万t	住宅、建築物系 8万t (チップ化後、パルプ材、燃料等へ) [実リサイクル率 2.3%]

註1 * 不燃物の残りはフェニックス等へ埋め立て、可燃物の残りは焼却後に内陸処分場、フェニックス等で最終処分。実リサイクル率は7.3%。
 註2 * 住宅、建築物系は市町が解体・処理し、国はその費用の1/2を補助し、市町負担の1/2については起債措置し、その元利償還時に特別地方交付税(95%)を行う。大企業事業所の解体は自己処理とする。

表2 木くずの再利用法

建築用へ再利用	解体で発生した故材を建築資材へ再利用する。昭和50年代まで盛んに故材売買され、利用されていたが、最近是人件費の高騰、外材の安値等で利用度が低い。今が見直しの時期!
チップ材へ再利用	故材をシュレッターにかけ、チップ化して再利用。殆どが燃料用になるが、パーティクル・ボード等ボード用や製紙用へ再利用可能だが、不純物が混ざると再利用困難。再利用の主は柱、梁材!
燃料へ	燃料へ利用。最近、重油等の価格が下がり、不使用になる事多い。
木炭へ	故材を炭にし、土壌改良資材や床敷き乾燥・白蟻用等にも利用可。

お詫び * 前号で募集の環境震災協力者は、N G O フロン回収・解体終了等で中止です。

② 長期にわたる再資源化・利用計画

確保——近隣自治体の協力必要!

① 選別の徹底とストック・ヤード等の

今後の廃材等再利用の課題は、

した柱材の引取りが決まっていない有様

増え、やっと廃材破砕機などが導入されたが、チップ化された木くずや分別

地を見に行つた。分別無しのごみ山が

例 * M D F材を型枠合板への利用

③ 処理技術の開発と実用化の促進——

利用等ではないだろうか。

⑦ 仮設住宅計画の見直しと仮設材の再

⑥ 再資源費用を助成する復興計画策定

⑤ ボード等再生品の流通システム確立

④ 排出業者と処理業者の協力

③ 国等がエコ・ラベル化のPR

② 長期にわたる再資源化・利用計画

① 選別の徹底とストック・ヤード等の

9 南洋材開発輸入の軌跡(その2)

I—戦後の輸入と△日板生産生産—

(1) ちよつと前号のおさらい

戦前の我が国における南洋材の利用と消費は、前号でみたように南洋材に対する需要がまずあって、そこから買材輸入や開発輸入が行われたのではなく、その逆だったのです。それが昭和五、六年頃、合板産業の分野でラワンを原料としはじめると、急速に需要が拡大し、それに伴って産地国における伐採権の取得と開発輸入が主流となってきました。だから、戦前の我が国の南洋材輸入の歴史は、そのまま合板産業発展の歴史とも言えましょう。戦前の合板生産のピークは昭和十五(一九四〇)年で、約七七〇〇万^m₂(註1)に達しましたが、戦災により昭和二十年十二月には月産一—三万^m₂にまで落ち込みました。

(2) 戦後の南洋材輸入の再開

太平洋戦争の進展とともに、南方と日本を結ぶ海上輸送力は急速に減少し、木材輸送どころではなくなり、遂に昭和十八年には完全に南洋材入荷が途絶しました。再開されたのは昭和二十三年のことです。

戦争で焼け野原になった国土を復興し、産業を回復するためにも、また国民に何とか生きて行けるだけの食糧を配給するためにも、物資を海外から緊急輸入することが当時の急務でした。しかし、そのために必要な外貨というものがあるで無かった日本にとって、頼みの綱は、エロアガリオアその他の援助、復興資金の借り入れと、加工貿易による外貨の獲得でした。

その目的のために昭和二十二(一九

四七)年七月には、政府ベースの管理貿易を行う目的で貿易公団が設立されました。そして、戦災復興のためだけでなく、アメリカ等進駐軍向けに必要な性の高かった建築用合板の原料としてのラワン材輸入が急がれたのです。

このような背景のもと、昭和二十三年六月には早くもフィリピンから第一船が、同年七月には北ボルネオ(サバ州)から第二船が入港しました。これが、戦後における南洋材輸入再開の第一歩でした。もっとも、この両船が積んで来たラワン材は、全量が進駐軍向け加工用にまわされました。

これを契機として、戦後の木材輸入は南洋材を手はじめとして少しづつ拡大されて行きました。(米材の輸入再開は翌二十四年)この南洋材輸入は、変則的な公団輸入という形態だったのですが、戦後の混乱期に政府が独自に

輸入を实行するだけの能力がある訳ではなかった。実際には、木材業者が輸入代行業者として、現地との交渉、価格、数量、配船に至るまでの実務を代行しました。それが前号で紹介した戦前に南洋材の開発輸入を行っていた木材業者で、彼等が戦前の取引実績やコネを活用して実務に当たった訳です。

第一船はフィリピンのスリガオ積みで実務に当たったのは南洋物産、続く第二船はサブ積みで、代行は野村商事でした。このように、戦後の我が国の南洋材輸入は、戦前のパイオニア達が復活させたようなものですが、それはやがて後述するように総合商社が主流を占めるようになり、いろんな環境面での問題が発生して来たのです。

(3) 南洋材輸入の増大

前述したように、戦後の南洋材輸入は変則的な政府管理の下、公団貿易という形で、進駐軍向け合板供給を目的に再開されました。しかし、この方式は昭和二十四年末で廃止され、同二十五年からは外貨割当制による民間貿易

が復活し、同時に昭和十六年から続いていた木材統制も廃止となりました。

これ以降は、戦後復興需要のためと、外貨獲得のための加工輸出貿易（合板輸出）のために、フィリピンを主流とした南洋材輸入が急速に増大しました。そして、それに拍車をかけたのが、昭和二十五年に勃発し、二十八年まで続いた朝鮮戦争による特需景気でした。この特需は、壊滅状態から這い上がる

うとしていた日本経済を一挙に立ち上げさせ、間もなく「もはや戦後ではない」（昭和三十二年経済白書）と言わしめた原動力となりました。

そして昭和三十五年には、南洋材が外貨割当制度から全面的にA A制（自動承認制）に移行し、ここに完全な自由化時代が到来し、同時に日本経済も高度成長時代へと突入して行ったのです。この輸入再開からA A制に移行す

表1 再開後の南洋材輸入量の推移
(外貨割当時代と自由化後の10年間)

年 度	木材総	南洋材	
	輸入量(千m ³)	輸入量(千m ³)	比率
1948(昭23)	6	6	100
49(昭24)	44	25	56.8
50(昭25)	105	98	93.3
51(昭26)	488	452	92.6
52(昭27)	619	549	88.7
53(昭28)	630	1283	78.7
54(昭29)	1803	1459	80.9
55(昭30)	2054	1850	90.1
56(昭31)	2588	2315	89.5
57(昭32)	2892	2459	85.0
58(昭33)	4160	3303	79.4
59(昭34)	5704	4230	74.2
60(昭35)	6379	4568	71.6
61(昭36)	9635	5549	57.6
62(昭37)	11047	6373	57.7
63(昭38)	13982	7798	55.8
64(昭39)	15302	7868	51.4
65(昭40)	16798	8848	52.7
66(昭41)	21949	11080	50.5
67(昭42)	28279	12469	44.1
68(昭43)	33567	13151	39.2
69(昭44)	35807	15685	43.8
70(昭45)	42366	17639	41.6

通関統計より

るまでと、木材輸入自由化となつてからの十年間の南洋材の推移と、全木材輸入量に占める割合は、表1〔註2〕のとおりです。

この表で判るように、輸入再開の僅か五年後の昭和二十八年には南洋材輸入量は一二八万三千㎡に達し、戦前のピークであった昭和十二年の七三万六千㎡(前号一五ページ、別表参照)を大きく上廻り、以後増大の一途を辿つて行きます。そして昭和四十七(一九七二)年に米材に首位を奪われるまで、実に四半世紀の長きにわたつて、我が国の木材輸入量のトップを占めていたのです。

(4) 合板製造の推移

戦前の我が国の合板工場は、ラワン合板、国産材合板をひつくるめて、ピーク時(昭和十九年)に二五一工場あり、生産量もピーク時(昭和十五年)には約七千七百万㎡に達していました。輸出もかなりありました。それが戦争末期の三都の大空襲による焼失や、原料難による廃業、疎開等で、終戦時に

は北海道、東北の中小工場を中心に七四工場に減少し、生産量も昭和二十年末には、僅か一一三万㎡と、今日でい

うと中堅合板工場の一カ月分位の数量まで落ち込んでいました。

表2 輸出再開後の原料別合板輸入の推移

* 表の金額は百万円単位

年 度	ラワン材合板		国産材合板		合計	
	数量(千㎡)	金額	数量(千㎡)	金額	数量(千㎡)	金額
1950(昭25)	2875	413	1175	201	4050	614
51(昭26)	9510	2258	3445	796	12955	3054
52(昭27)	4392	786	992	296	5384	1082
53(昭28)	11949	2545	2627	880	14576	3425
54(昭29)	36397	7474	4812	1712	41209	9186
55(昭30)	50419	9992	8086	3162	58505	13154
56(昭31)	51968	10315	13146	5075	65114	15390
57(昭32)	65865	13258	16151	6559	82016	19817
58(昭33)	69666	13616	16465	6372	86131	19989
59(昭34)	85671	19181	19446	8335	105117	27516
60(昭35)	68614	13605	19793	8925	88407	22530
61(昭36)	67716	13971	18511	7146	86227	21117
62(昭37)	67741	15732	21301	8660	89042	24392
65(昭40)	52687	8240	25104	9032	77791	17272
66(昭41)	44592	7310	25366	10120	69958	17430
67(昭42)	34179	5892	27010	10365	61189	16257
68(昭43)	44797	7946	33900	14486	78697	22432
69(昭44)	30917	5392	33991	14463	64908	20395
70(昭45)	20891	4066	30455	11197	51346	15263
71(昭46)	14100	2743	30702	12984	44802	15727
72(昭47)	2280	443	33313	14240	35593	14683
73(昭48)	286	167	25074	12321	25360	12488
74(昭49)	209	172	20590	11684	20799	11856

通関統計及び昭和40年以降は日本貿易月表の集計
昭和24年以前のラワン合板は全量進駐軍向け出荷

以後、北海道を中心とした国産材を原料に、進駐軍用に細々と生産を続けていきましたが、昭和二十三年六月に、貿易公団によって、少量ながら南洋材の輸入が再開され、殆ど全量が進駐軍用として合板業界に廻されていきました。

昭和二十五年四月以降は、外貨割当制への移行に伴い、輸出入合板原料としてのラワン材への優先外貨割当が増えたのと、戦争特需により、合板業界も急速に成長を遂げて来ました。

そして昭和二十八年に、それまで品質に難点があつて中断されていた対米合板輸出が再開されるようになり、表2〔註3〕に見られるように、同年を境に、合板輸出は数量、金額ともに急速に膨張して行きました。ことに、朝鮮戦争特需の終焉と、それまでの輸出仕向先の主流であつたオーストラリアの輸入関税引き上げによる輸出停滞とによつて、一挙にしぼんでいた昭和二十七年に較べると、二年続きで3倍、3倍と増加し、以後も増加の一途を辿っています。

その原因としては、それまでオープ

ン・アカウントで行われていたフィリピンの輸入ラワンが優先外貨の割当が受けられるようになり、原木の入手が容易になったこと、尿素系接着剤が開発されて、品質が向上し、対米輸出にドライブがかかった事等です。

(5) 合板消費構造の変化

上記のような要因から、輸入南洋材に占める合板用比率は極めて大きなものとなり、昭和三十年代に入つて以降、常に五〇%後半から六〇%位を占めていました。この比率は、昭和五十年代に入るとさらに高くなり、七〇%近くになったこともありましたが、それはまた別の要因によるものでした。

また、合板の総生産量に占める南洋材合板の割合も極めて高いものがありました。(表3)〔註4〕 この比率の高さはさらに高くなって行き、やがて針葉樹合板が現われるまで続きます。

輸出量は、前出の表2に見られるように、金額、数量とも昭和三十四年がピークとなり、しばらくは高水準を維持しますが、やがて昭和四十年代に入

ると、急に減少します。これは台湾、香港、韓国といった間もなく中進国と呼ばれるようになった諸国の合板技術が向上し、品質が良くなり、かつて昭和二十五年から三十年代末までの我が国合板産業がそうであつたように、輸入南洋材を原料として、アメリカ、中近東、オーストラリア向け等に加工輸出するようになったからです。

そして、昭和五十年代後半から六十年代に入ると、そういった水平国際分業の時代から、南洋材産地国の資源ナシヨナリズムに起因する木材工業化時代へと変化し、合板王国を誇つた我が国も、やがて合板輸入国へと変貌して行くのです。

時代の流れと言つてしまえば簡単ですが、戦後五十年の南洋材輸入や合板輸出の跡を振り返ってみると、その構造の変化の大きさに驚きますが、歴史は繰り返されていつて、どっちに転んでも熱帯林の破壊に歯止めのかからない状況には、撫然とならざるを得ません。

輸出入の統計を作るために、統計品

目表というのがありません。かつて外貨の足りなかつた昭和三十年頃（当時の日本の外貨準備高は、二十億ドルを出たり入ったりしていた頃）に、合板は既に五千万ドル近い外貨を稼いでいたので、当然輸出品目表の方に項目が掲載されていきました。時代が変わって合板輸入大国になってしまったのに、一向に統計品目表の改正が行われず、いまだに輸出統計の方に分類されているのも、あながち大蔵省関税局の怠慢ということだけではなく、輸出国が国策だった時代の残照なのかも知れません。

そして、昭和六十年代に入ると、熱帯林保護の気運が急にたかまって来て、コンパネ時代へと転換していた合板消費構造に大きな変化が生れて来るのです。

（この項続く）

註1 * 日本合板技術研究所『合板レポート 一ト・第一〇一号』七頁より引用

註2 * 日本南洋材協議会編『南洋材史』二七二頁第II・二六表より抜粋作成

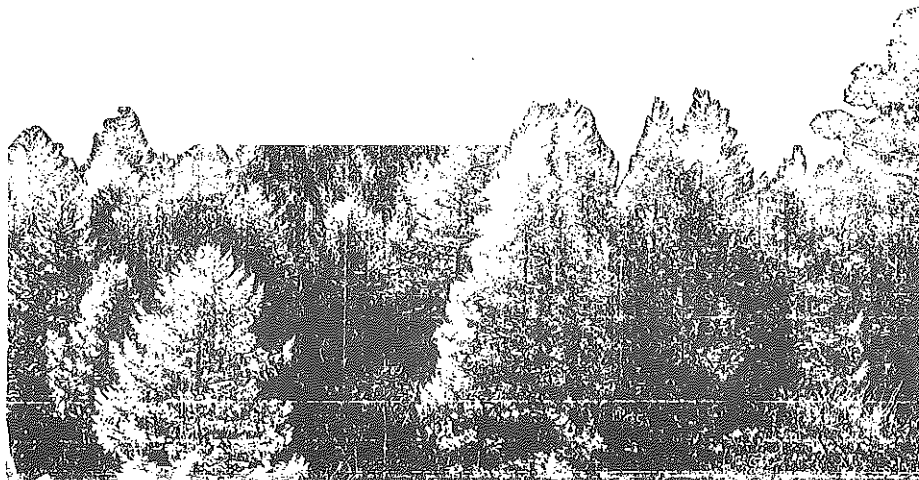
表3 戦後10年間の樹種別合板生産量

年 度	生産量総数 (千㎡)	ラワン合板		国産材合板	
		生産量(千㎡)	比率(%)	生産量(千㎡)	比率(%)
1948(昭23)	27828	293	1.1	27535	98.9
50(昭25)	3997	2837	71.0	1160	29.0
52(昭27)	47581	28789	60.5	18792	39.5
53(昭28)	100892	76655	76.0	24237	24.0
54(昭29)	132173	106730	80.7	25443	19.3
55(昭30)	170650	139173	83.2	28677	16.8
56(昭31)	207930	172809	83.1	35121	16.9
57(昭32)	244322	200524	82.1	43798	17.9
58(昭33)	268040	224871	83.0	43169	16.1
59(昭35)	322543	266946	82.7	55597	17.3

林野庁林産課資料

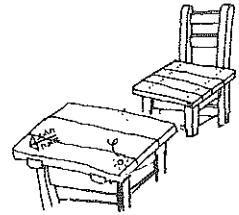
註3 * 『南洋材史』同頁第Ⅴ五九表より引用作成

註4 * 『南洋材史』五〇七頁第Ⅳ二一表より引用



家具

①



安く加工しやすいので、戦後、家具製造の機械化が進む中で、多量の熱帯木材が使われるようになりました。家具には、輸入量の三割近くが使われています。特に合板やチップボードとして、タンスや食器棚等の天板、側板、机の芯材を始め、多くの家具に使われています。合板には、表面に薄い突板ツキいたや木目の印刷紙が貼られ、わかりにくくなっているのです。表示も無いので、消費者にも知られずに処分されているのが現状でしょう。

『家庭用品品質表示法』が家具の表面材の表示を規定しているのですが、とても簡単すぎるのです。例えば「天然木」という言葉が許されていますが、材質の具体名も示されていません。食品表示に對してお粗末です。通産省の家具係の方に問い合わせてみたら、「はあ、そうですね。(簡単すぎますね)」と言うのです。

日本だけで全ヨーロッパと同じぐらいの熱帯木材を消費している。そして、そのかなりの量が家具に使われている。その事実をまず「知ってもらい」、家具の使われかたの実態を「知り」、無駄な消費をなくすにはどうすればいいかを「一緒に考えていく」ために、取り組みを始めました。

その第一歩としてやっています。

「木製家具について のアンケート」 中間報告

会員さんには、会報に同封してお送りしました。返送用切手を負担していただかねばならず、心苦しいのですが、ご協力、よろしくお願いいたします。(ウータンに對するご意見がありましたら、用紙の裏にどんどんお書きください)

会員以外の方については、連続講座や「出前」講座で、また知人に依頼して、アンケートをおこなっています。

もし、知人に記入してもらおうなど、協力していただける方がおられましたら、用紙をお送りいたします。お手数ですが左記までお知らせください。

〒560

豊中市玉井町2-1-4 135-1306

06-841-8221

井下 祥子

「こんな意見、あんな情報」

回答のなから：

* 賃貸マンション、アパートで、家具付きのものが増えれば買う必要がない。
* そのなえつけの家具は、地震にも安全で省スペース。

* 長持ちし、愛し通せる家具は、手作りあるいは注文製作品であろう。
* ダンボール家具は収納・配送が容易で折りたたみ可。

* 百年くらい使える家具を(五年で捨てるときの)三倍で買って安くなる。

* NHK教育で、家具リフォームの番組をやっていた。

* 国産材家具の公共施設への導入を。

* 椅子ならカバーをはりかえる。

* 家具職人の知り合いがあるので、知りたいことがあれば協力してもらえる。

* 雑貨やインテリア雑誌の影響が大きいので、そういうところや、インテリアスクールなどの連携も必要。

☆☆ 『家具の入手方法は?』の問いに

「拾う」「自分で作る」「中古品をもらう」との答も結構ありました。

むむっ、できる……!

デザインや機能性が重視されている家具ですが、表示にも消費者が声を上げる責任があるでしょう。

二百年も鳥や虫たちを擁し、周りの木々と支えあい生きてきた豊かな巨木が、私達の暮らしの中にあるのです。「カラ―ボックス九八〇円」と投げ売りの広告を見ると、悲しくなってしまうのです。安いものは価値の無いものといった感覚が現代の社会ではどうしてもつきまといまいます。貴重なものだといいことを一人でも多くの方々に知って頂き、丁寧に扱い大切にしてゆくようなムードを作ってゆきたいものだと思うのです。また、購入する時には、材質や工法をチェックしたり、壊れたらリフォームしてくれるか等も吟味する人が増えるようにと思います。

子の世代に引き継げる家具を求めるようになれば、企業も変わるでしょう。消費者一人一人が変わることで、少しでも哀しい破壊を止められるようウータン会員の皆さまと共に取組みを作ってゆけたら幸いです。ご意見等、お待ちしています。

(奥村知亜子)

◆手作り家具

私達の求めるものが丁寧に作られ、さらに年月を経て味わいの出るのが手作り家具の魅力です。

今、ウータンの表紙を描いている永田健一さんは、外材(特に熱帯材)が安易に使われ過ぎていることに疑問を持って以来、国産材で家具を作り続けています。暖かみのあるすっきりしたラインが素敵です。

☆別注家具製作＋シルクスクリン印刷
Zoo 永田健一 ☎0720(81)4939



▲“Zoo”永田さん作手作りイス

◆国産材学校家具

学校用の国産材でできた机が開発され広められていることが、ウータン二七号にも載りました。替えの部分もあり組立ても自分ででき、修理もしてもらえます。成長に合わせて高さも調節できるので、便利で健康的です。現在普及しているスチール製のは、机の芯材が合板で多量の熱帯木材が使われています。学校の「裁量」で購入できる所が多いとのこと。近くの学校の校長に働きかけてみませんか。

☆天竜ウッドワーク專業協同組合(静岡)
☎0539(28)0702

◆消費者の声を届けよう

「熱帯木材を使わない家具を作っている所を教えてください。」と問い合わせしてみませんか。熱帯木材を使わない消費者が増えていると感じてもらえればいいのですが……。

☆全国家具工業組合 ☎03(3533)9551

大阪家具工業組合 ☎06(561)4401

☆家具工業組合は各地にもあります。

問合せた報告をお寄せください。

THANK YOU
 オリンピックに届いたお便り

「会費とおたより」

ありがとうございます！

多少ですが、カンパさせていたします。新しい知事のもと、「死なない程度」にガンパッテ下さい。私も陰ながら応援させていただきます。 馬橋憲男

木材野焼き中止、リサイクル提唱されている事聞いています。私も賛同します。がんばりましょう。 小森富美枝
 今回の地震で、天然木のタンスはビクともしなかったのに、合板の本棚はドサツと倒れて、こわれてしまいました。震度にもよるかもしれませんが、やっぱり、丈夫なものの方が、結局は長持ちするのですね。 宮野由紀子

「ウータン」35号のアート・ギャラリー「エンピツの森」にホレました。 KANG You・mi

私の希望としては、熱帯林の問題ばかりでなく、森に関するあらゆる事を扱ってほしいのです。例えば、水源林の事とか、実際に日本の森にボランティアが入ったりなどを。 宮澤朔子

……うむ、大切な事ですね。 「枝打ち族」というグループと協力しての「林業体験」（裏表紙のスケジュ

ール欄をご覧下さい）、国産材利用の建築家さんに知恵をお借りするなど、わずかずつやっています。（事務局）

「会費・カンパを

いただいた方（敬称略）」六月五日まで

安達昌代 馬橋憲男 康由美（切手）
 菊池明子 倉内和子 後藤勇一 小森
 富美枝 坂口友良 柴田昭子 辻秀之
 とよなか 国際交流協会 中西真佐子
 平井英司 三国千秋（地球の友金沢）
 水田哲生 水野武夫 見取徳明
 宮澤朔子 宮野由紀子 山中浩一
 米川誠一 蓮原耕児

「裏返し封筒を送って下さったかた」呼びかけにこたえて、沢山の封筒を送っていただきました。

何度も送って下さった梅尾文子さんはじめ、猪俣栄一さん、小川輝樹さん、佐野徳子さん、藤村はるえさんなど、本当にありがとうございます。 会報発送に使わせていただきます。 資源と経費の節約（年間約一万五千円）とごみ減量。三拍子そろったウレシイ協力です。あなたもいかが？

3つのR-Recycle・Reuse・Reduce

今、日本の社会はRecycleの落とし穴にはまっているかのようだ。ものを「次々に買い替えて前のはRecycleに」と。Reuseとは「物を誰かがまた使う事」とどまらず、物（商品）を長く使う、修理して使う、そういう大切に長く使う習慣、をも内包している。

物をやたら買わず長く使うこと…消費者のReduce（消費縮小）が社会に定着していけば生産者（企業）側のReduce（生産縮小）も定着していく。消費・生産の両面のReduceをを目指す事なくして環境問題における改善は期待できない。

しかしこの工業社会において企業が生きつづけるためには、生産拡大が必須条件だ。しかしReduceの概念は資本の理論と相容れない。スリム社会・スリム政府を目指す上で、余りにも高すぎる垣根だ。

原子力産業も生産拡大が思うように進まない故、なりふりかまわずの行動に出ている。また、電気・コンピューター業界では「マルチメディア」なるものが救世主であるらしく、資本投資も半端ではない。

このような何百兆円ものハイテク産業が実現されれば、それに見合うハイテク汚染がもたらされるのは自明だ。いったいどれだけの量の有機塩素化合物が増産され、使われ、環境中に排出されるのか…。マルチメディア社会とは、とんでもないものようだ。

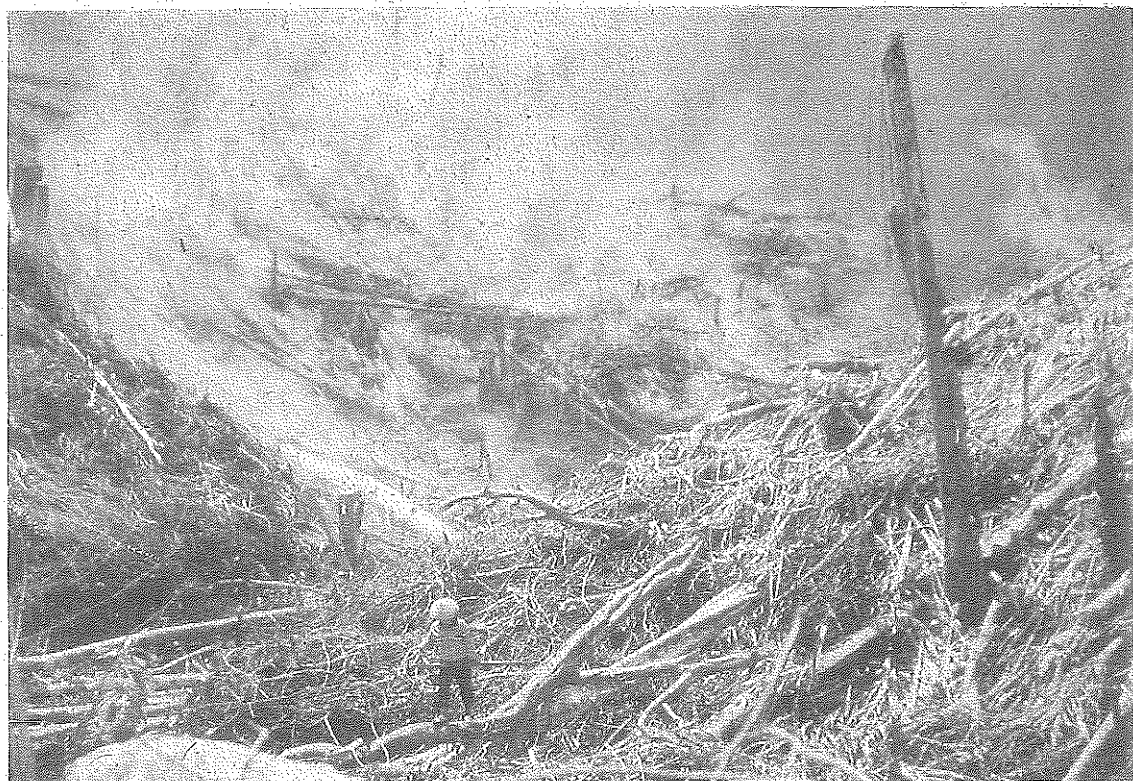
今の社会構造の中で暮らしている我々がすべきことは、その構造の中に生産縮小を組み入れること。大きすぎる命題であっても取り組むしか後はない。状況は極めて悲惨だ。

会員の向井千晃さんの投稿です。

森の写真館

photo 永田 健一

①



●90年8月、始めてサラワクに入った。バラム川上流にあるカヤン族のウマバワン村はちょうど焼畑の火入れの時期であった。2〜3週間前に伐採された木々に手際よく火がつけられ、正午に始まった火入れも夕刻には一面黒い灰におあわれてしまった。 (N)

Save The Tropical Forests

HUTAN ACTION SCHEDULE

枝打ち族

林業体験と熱帯林学習会

とき 7月21日(金)～7月23日(日)

ところ 多紀郡丹南町大山

集合 JR篠山駅

内容 枝打ち・間伐などの林業体験をして、熱帯雨林・林業についてみんなで考えていきます。

費用 約20000円 定員 15人

連絡先 PHD協会(担当 渡辺) Tel 078-351-4892

関西熱帯木材削減委員会シンポジウム

とき 10月8日(日) 13時30分～(予定)

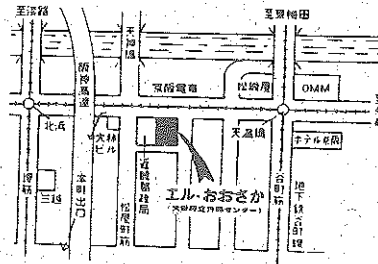
ところ エル大阪(天満橋下車)

内容 削減委員会からの提案
熱帯林保護を行うには

エル・おおさか 案内図

(大阪府立労働センター)

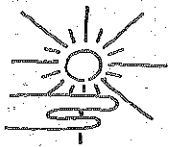
大阪府中央区北浜東3番14号
TEL 06-442-0001



熱帯林連続講座part 3 (秋からの予定)

内容 私たちの暮らしと熱帯林について考えていきます

- ・家具、住宅・建築
- ・廃材・ごみの行方
- ・海をこえる資源

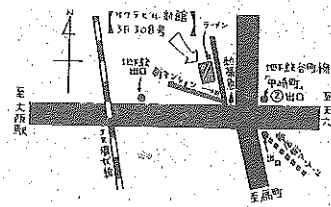


編集長の大役も手取り足取り教えてもらってなんとかできました。さてこの夏は、枝打ち族にPNGツアー。勉強しまくりだぜ!

T・A



HUTAN



●ウータン定例会は、第2と第4火曜日午後7時半から、関西市民連合事務局(上記地図)にて行っております。
TEL:06(3)72-1561 まで。